主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2017 graph magazine VOL. 43

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 43 定価100円（税込み）

メッセージ

4 御霊による歩み　ゴットホルド・ベック

ベック兄葬儀特集

26 ゴットホルド・ベック兄弟の証し「ただ、主だけに」からの抜粋

30 葬儀メッセージ　2016年8月28日　重田定義

36 死は終わりではない　ゴットホルド・ベック

54 ゴットホルド・ベック兄弟の足跡

56 ゴットホルド・ベック兄弟はゴールインされた　アンドレアス・プレッチ

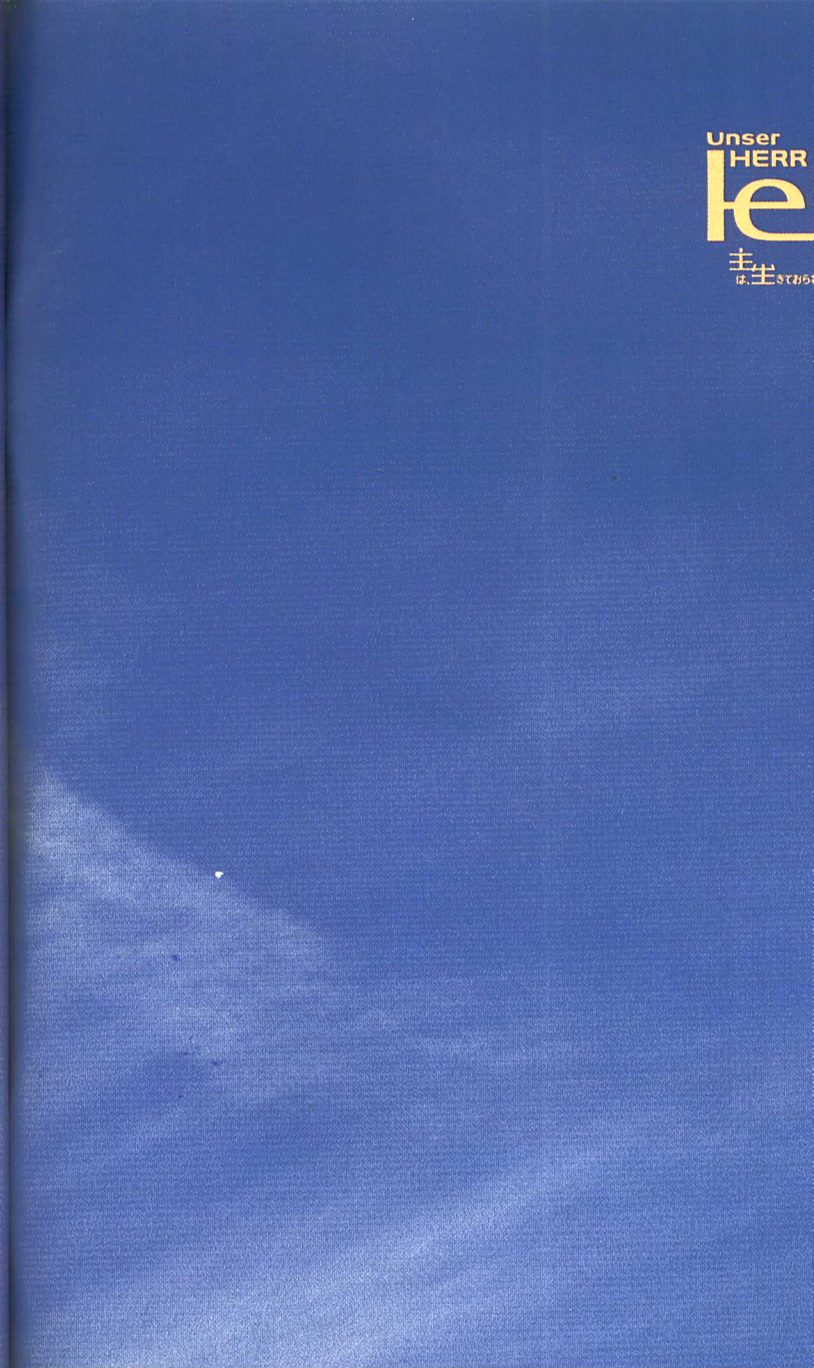
4人の証し

64 主の導きにあずかる日々　広橋雄二

69 聖さに惹かれて　広橋真由美

77 主の十字架　後藤政彦

88 イエス様に導かれて　後藤緑



御霊による歩み

ゴットホルド・ベック

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。（ガラテヤ　5・16～18）

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。（ガラテヤ　5・24～25）

今回は、キリスト者としてどうしても知っておかなければならない御霊の歩みについてともに学びたいと思います。

信者の歩み方は二つに分けられます。一つは「肉」による歩み、もう一つは「御霊」による歩みです。イエス・キリストを自分の救い主として受け入れればそれで十分だ、と考えているキリスト者がたくさんいますが、イエス様はそれでは十分でなく御霊様による歩みをしなければならないと教えておられます。聖書は次のように言っています。

肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。（ローマ　8・8～9）

かつてイエス様が地上におられた間、イエス様と一緒に歩んだ弟子たちは、素晴らしい主の御力を目で見、耳で聞き、体験しました。彼らはどんな困難にあっても行き詰ることがなく、欠乏することもありませんでした。病気で悩んでいる人は、イエス様の御手によってすべて癒されました。悪魔や敵対する者が向かって来ても、主イエス様の前では手も足も出ませんでした。

現代に生きる私たちキリスト者にとっても、このイエス様の力が現実のものとならなければなりません。もし主と一つになるならば、これを現実のものとすることができるのです。私たちのあらゆる問題は主によってまったく消え去り、主の御側（みそば）近くにはべるなら、神のご臨在の平安が心を支配し、限りない主の御力が私たちの内側を満たしてくださいます。

ある時、主イエス様は弟子たちに「わたしはやがて天に帰る。しかし、わたしの代わりにわたしはあなたがたに助け主を与える。それはあなたがたを導き、力づけるであろう。あなたがたは悲しんでいるが、わたしが天に行くことは、かえってあなたがたのために益なのだ」ということを告げられました（ヨハネ 14～16章）。弟子たちはこれを聞いて驚きましたが、主が昇天された後、五旬節の日に、主が約束された御霊の降臨を受けて満たされました。弟子たちは「神の宮」、聖霊を内に宿す者となったのです。

同じように、御霊様は私たちキリスト者の内にも宿っておられます。次のみことばは、私たちにもあてはまるみことばです。

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。（1コリント　3・16）

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（1コリント　6・19〜20）

生きる真の神が私たちの内に宿っておられるのですから、私たちはこの世で一番の財産家と言わなければなりません。

ところで、今回の問題は、御霊様を宿してはいるけれど、私たちが果たして御霊によって歩んでいるかどうかということです。聖書にある「御霊による歩み」を私たちはすでに自分のものとしているでしょうか。

主である神様が一番喜ばれるのは「主よ、私は哀れな存在です。どうか救ってください」という人間の叫びだと聖書は言っています。もし、ここまで主の御前に砕かれるなら、御霊様の歩みに入ることはそう難しいものではありません。人間の目から見ると完全に打ちのめされた哀れな状態が、主である神の目には、その人が解放される絶好の機会なのです。

ではこれから、三つの点に分けて御霊による歩みについてご一緒に学びましょう。一つ目は「霊肉の闘い」、二つ目は「私たちのいのちであるキリスト」、最後に「御霊の法則」です。

1 霊肉の闘い

なぜ主を信じる者の間に大きな違いがあるのでしょうか。同じ御救いにあずかり、同じ御霊様を受けていながら、ある人々は霊的であり、ある人々は肉的です。

その理由は、どのキリスト者も二つの性質をもっていて、霊的なキリスト者は肉に打ち勝っており、肉的なキリスト者は肉に打ち負かされているからです。これが私たち主を信じる者の間にも見られる違いの原因なのです。

この二つの性質を持っていることを、私たちは経験によって知っています。心の内には二つの法則があって、一つは罪に引き込もうとし、もう一つは主イエス様の元に私たちを引き上げ、高めようとします。一つは古いアダムの罪の性質であり、もう一つは新しい霊的なキリストの性質です。

人間の生まれながらの性質は、罪しか犯すことができません。それは魚が水の中でしか生きることができないのと同じです。古い性質は罪の中に溺れているのです。そしてこの「古い人」は神を知らず、神に従わず、神に喜ばれることができません。この古い性質は私たちキリスト者の内にも死ぬまで残っているのです。

一方、主イエス様を受け容れたことにより、私たちキリスト者の内には罪を犯すことのできない、新しい性質も与えられています。この新しい性質は、神を認め、神に従い、神に喜ばれる性質です。この新しい性質は聖霊によってのみ与えられます。

こうして信仰者の内側には生まれながらの古い罪の性質があり、同時に聖霊によって与えられたまったく新しい性質もあるため、内側で霊肉の闘いが始まるのです。多くのキリスト者は、この「霊肉の闘い」を闘って疲れ、「勝利の生活は私には不可能だ」と言って絶望してしまいます。また、ある人々は闘うことを止めて、この世を愛する者となってしまいます。パウロのように勝利の声を上げることのできる人は極めて少ないのです。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、

あなたを解放したからです。（ローマ　8・1〜2）

霊肉の闘いに勝利できないのはどういうわけでしょうか。その理由は、多くのキリスト者が、肉の性質には「良いところが一つもない」という事実を深く知ることができていないからです。私たちは「罪にまみれた存在」です。魂の中核から全体、隅から隅まで完全に罪にまみれているのです。パウロも次のように言っています。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。（ローマ　7・18）

「肉による歩み」とは、自らの力で何かすることであり、そのように続ける限り、主イエス様の勝利を自分のものとすることはできません。主イエス様の勝利は、私たちが御霊によって歩んでいるときにはじめて、経験することができます。

「御霊による歩み」とは、内に住み給う御霊様に「自分は何もできません。あなたにすべてをおゆだねします」と言って、すべてをゆだねて歩むことを言います。その時、主の偉大さを心の底から認め、主に従い、主に喜ばれる生涯を送ることができるのです。

私たちはまだ「自らの力」に頼り、肉によって歩んでいるのでしょうか。パウロの生きていた時代の多くの信者がそうでした。聖書にあります。

他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。（ピリピ　1・17）

どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。（ピリピ　3・2〜3）

というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。（ピリピ　3・18〜19）

もちろん主に仕えるには「良い」肉をもって仕えていることでしょう。ですが、たとえ「良い」肉であっても悪い肉であっても、生まれながらの肉である限り、主の御前には厭うべきもの、嫌われるべきもの、憎むべきものなのです。多くのキリスト者は自分では意識していないかもしれませんが、自分の力で、自分のために、自分によってさまざまなことをやっています。

今、主の十字架を仰いでみましょう。イエス・キリストは私たちの身代わりとなって死に、甦り、そして天高く父の御座の右に昇り、そこから聖い神の霊をお注ぎくださいました。それは私たちを変えて、私たちが主のために、御霊様により、御霊様を通して、すべてのことを行うようになるため、つまり、私たちが御霊によって歩むようになるためだったのです。

何か事が起こると直ちに主の御前に行き、「私には何もできません。あなたは私の内におられる柔和であり、謙遜であり、愛であり、すべてです。どうかあなたがこのことに解決を与えてください」と祈るのが、御霊によって歩む人の特徴です。

私たちはすでに次のような経験はしたかも知れません。自分の生まれながらの性質を恐れて、何とかしてそ

御霊による歩み

ために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」（出エジプト　14・13〜14）

この時、イスラエルの民は自分で何かを為そうとはしませんでした。主が何をしてくださるか、ただ主にゆだねて見ているだけでした。

ところで、サタンは私たちキリスト者が御霊によって歩むことを妨げようと、強力に私たちの肉の性質に働きかけてきます。過去の戦争で日本と中国が戦ったとき、日本軍は戦車を多く使いました。中国軍はこれに対し、狙撃兵を組織し、面白い戦法を考えたそうです。それは、中国兵は戦車の通り道に隠れていて、日本の戦車がやって来ると、まず一発だけ鉄砲を撃ちます。すると戦車は立ち止まって、どこから弾が来るのか見極めようとします。しばらくたってまた一発撃ちます。これを繰り返していると、そのうち

こから脱け出したいと考え、主におゆだねしてすべてを任せ切ります。気がついてみると、知らずに古い性質が出ないで済んでいた・・・。このような経験をしていたとしても、もしそれが一時的なものなら御霊による歩みとは言えません。いつも「古い人」に打ち勝っていてはじめて、御霊様によって歩んでいると言えるのです。

「御霊による歩み」の中に入ると、「勝利のために闘う」ことは終わり、勝利のうちに休むことができます。内住の主にすべてをおゆだねし、主に一切をしていただくという任せ切った生活が御霊による歩みです。出エジプト記からそのような個所を見ましょう。

それでモーセは民に言った。「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。主があなたがたのに戦車の中にいる日本兵は我慢できなくなり、弾の来る方向を見定めようとして戦車から首を出します。そこを狙って狙撃兵が日本兵を撃ち殺し、戦車を分捕るという戦法です。サタンが用いる戦法も、いつもキリスト者の「己」を外に出させようとするものです。サタンの手に乗り、うっかり自分自身を高めたり、また自分で何かをやろうとすると、必ず失敗して打ち負かされてしまいます。

もし私たちが自分に死に、「無力」な者となって何もやろうとしなければ、御霊様が代わりに為してくださいます。その時はじめて、勝利の生活を送ることができるのです。冒頭に掲げた「ガラテヤ人への手紙」のみことばを通して、パウロはキリスト者たちに御霊によって歩むように、切に願って奨めているのです。

御霊による歩みとは、闘いがやみ、御霊様が私たちの内に、また私たちを通してなされる御業を見て生活することを言います。

2私たちのいのちであるキリスト

霊肉の闘いが終わったとき、パウロは「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」（ローマ 7・25）と喜びの声をあげました。これと同じ意味のみことばがガラテヤ人への手紙2章20節です。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

パウロは、キリスト者のいのちは主イエス様のいのちであるべきだと言っているのです。キリスト者のいのちは、生まれながら持っているいのちより多少改善された「ましな」いのちというのではなく、御霊様によって新しく与えられた主イエス・キリストのいのちでなければなりません。「新しく生まれる」ということは、良くなったということではなく、主イエス様ご自身が、御霊様によって私たちの内にお入りになったことを意味しているのです。しかし、内に与えられたこの新しいいのちは、そのままであってよいのではなく、いよいよ成長して外に現われていかなければなりません。パウロはガラテヤの信者たちにこの点が欠けていることを知り、彼らのために苦しんでいたのです。

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

（ガラテヤ　4・19）

御霊によって歩むには、私たちがイエス・キリストご自身のいのちで生きることです。あるところに、子どもたちの教育に心を悩ませているクリスチャンの夫婦がいました。二人は子どもを教育するには、自分たちはあまりにも忍耐が不足していると考えていました。そこで伝道者を招き、このために祈ってもらおうとしましたが、その伝道者は「祈っても多分、聞き届けられないでしょう」と言います。二人が驚いてその訳をたずねると、「あなたがたに必要なのは忍耐ではなく、主ご自身です。忍耐、謙遜、柔和、愛、それらは、バラバラに与えられるものではなく、主ご自身を内に宿すとき、ともに与えられるものですから」と言われました。私たちが主ご自身に宿っていただくとき、私たちに必要な愛、忍耐、またその他のあらゆる徳が、主イエス様のいのちとともに、私たちの内に与えられるのです。

イエス様を受け容れた者が、ひとりも滅びることなく持つようになる「永遠のいのち」とは、一体何でしょうか。それは言い換えれば、主イエス様ご自身です。

そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

（1ヨハネ　5・11～12）

主イエス様は「いのち」であり、「聖さ」、「謙遜」、「愛」であられます。

「聖さ」とは何でしょうか。私たちは、主を信じたら少しずつ次第に聖くなっていくと考えていますが、それは聖さの「実」です。聖さは、主ご自身です。

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。

（1コリント　1・30）

あなたは忍耐を必要としているのですか。忍耐は主ご自身です。私たちに愛や聖さが欠けているのでしょうか。主ご自身が、愛と聖さそのものです。主イエス様は、私たちの持つありとあらゆる問題の答えとなってくださいます。パウロはガラテヤ人への手紙2章20節で「キリストが私のうちに生きておられる」、つまり、「キリストは私のいのちである」と言っています。私たちも、いよいよこの驚くべき現実に、心の目を開かれて行きたいものです。そして、次のように祈

御霊による歩み

れたら幸いです。「主よ！私は自分の力では、あなたのみこころに適う生活を送ることができません。どうか、内に住み給う御霊様が私を用いて、みこころに適う歩みを為させてください」と。このように砕かれて、主にまったくおまかせする生涯に入れたら幸いです。主に任せることと、自分で試みることとの間には、天国と地獄の差があるのです。

キリスト者には霊肉の闘いがあることと、私たちのいのちがキリストであることに目が開かれるとき、御霊による歩みに確信をもつことができます。さらに御霊の法則について、学んでみましょう。

3 御霊の法則

パウロは新しく生まれ変わってキリスト者になってからも、長い間、罪に定められたような重い空気の中に住んでいたようです。そしてどんなに自分で努力しても、主の御心にかなった歩みをすることはできないと悟っていました。その経験を彼はこう言っています。「肉にある者は神を喜ばせることができません」（ローマ8・8）。その前の7章24節では「私は、ほんとうにみじめな人間です」と叫んでいます。

ところが、この同じパウロがピリピ人への手紙4章13節では「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです」と言っているのです。このような大きな変化が、なぜパウロの内に起こったのでしょうか。その答えはローマ人への手紙8章2節にあります。「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」。いのちの御霊の原理は罪と死の原理よりもさらに強いのです。

ここで少しこの二つの法則・原理について考えてみましょう。法則・原理とは何でしょうか。それは繰り返し起こる現象です。例えば、万有引力の法則があります。私たちが世界中のどこにいても、本を落とせばそれは下に落ちます。例外はありません。それは引力があるからです。

この引力の法則に似た法則が私たちの心の中にもあります。生まれながらの古い性質はいつも、この世に惹きつけられこの世のことを思います。パウロは働き人に向かってさえ「彼らの思いは地上のことだけです」（ピリピ3・19）と攻撃しています。私たちキリスト者は死ぬまで、罪と死の法則を心の内に宿しているのです。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。

すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ　7・18～24）

問題はこの罪と死の原理・法則から、私たちキリスト者がいかにして解放されるかということです。それは、この法則が別なものに変わるか、または、その法則を支配するさらに強い法則が生まれることによって可能で

す。万有引力の法則があっても、本が手で支えられているなら、決して下には落ちません。引力より手の力の方が強いからです。同じようにキリスト者の内には罪と死の法則が潜んでいますが、それとは違う、より強い御霊の法則によって罪と死の原理の働きがとどめられます。

キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。
（ローマ　8・2）

私たちは古い性質を持っていますが、「地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい」（コロサイ　3・2）のみことばを心に留め、天的なものの中に、無限に成長していかなければなりません。

御霊様によって主イエス様は私たちの内に住んでおられます。私たちは主の甦りの力にもあずかっています。この事実に心の目が開かれますように。

ところで、この御霊の原理・法則はいかにして私たちの「外」に現われるのでしょうか。この御霊の原理の現われについて、もう少し考えてみましょう。

もし主イエス様が私たちのいのちとなっているなら、御霊様は私たちのできないことを簡単にやってくださいます。その時、罪と死の法則は少しも力を発揮することができません。パウロはこのような御霊の原理による勝利に到達するまでに、長い時を要しました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
（ローマ　7・18）

パウロは長い間、勝利を自分の意志の力で得ようと

努力していました。そのように努めている間は主を喜ばせることはできず、ただ主を悲しませるばかりでした。多くのキリスト者も自分の「良い」意志の力で、何とかしてクリスチャン生活をまっとうしようと考えています。しかし、それはちょうどガソリンの入っていない自動車を押して歩くようなもので、大変な骨折りです。聖書は語っています。

神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。
（ローマ　6・23）

キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。
（ローマ　8・2）

この二つのみことばは同じ一つの賜物について書かれています。私たちは勝利の生活を送るために新しい賜物を受ける必要はありません。ただ、主がすでに与えてくださった賜物に心の目を開くことが必要なのです。主イエス様は、私たちにすべてを与えてくださいました。私たちは主が与えてくださったものに向かって、目を開きさえすればよいのです。ローマ8章2節には「御霊の原理が解放したからです」と過去形で書かれています。自らの努力はまったく虚しく、それどころか妨げであることが分かります。もし私たちが自分の努力とすべての意志を主に明け渡すならば、実際生活において、御霊の原理がいかに力強いかを経験するはずです。

主イエス様は山上の垂訓で「空の鳥を見なさい」（マタイ　6・26）と言われました。その鳥に「万有引力の法則があるのに、よく落ちないで空を飛ぶことができるね」と声をかけることができるなら、鳥は「私たちは引力もニュートンも知らない。こんなふうに飛べるの

は私たち鳥のもっている本来の性質だからだよ」と答えるでしょう。もちろん、鳥にも引力の法則は働いているのです。鳥が病気になり、飛ぶ力がなくなれば地に落ちてしまいます。

主イエス様が本当に私たちのいのちになっているなら、御霊の法則は罪と死の法則より強いということが分かります。御霊様が私たちの内に満ちておられるなら、主の御心に適う生活をすることは実に簡単なことなのです。私たちの意志や努力で行うのではなく、私たちの内に住み給う御霊様が、主の御心に適う生活を為させてくださいます。

キリスト者であっても生まれつき忍耐のない人が、忍耐をもつように努めるのは大変な闘いです。その闘いの結果は絶望的です。聖書は私たちが自らの努力をもっては、決して主の御心に適う歩みはできないと教えています。また主は私たちができないことをよく知っておられ、そのために御霊様を遣わしてくださいました。この主が与えられた「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理」によって、真の善悪をわきまえることができるのです。いくら教育を受け教養を積んでも、主の御心に適った生活はできません。ただ、私たちの内に住み給う主ご自身によってのみ、主の御心に適う生活が可能です。その時、「自分の話し声は大きすぎた」、「この笑いはよくない」、「これは誤った動機だ」…など、いろいろ御霊様によって教えられます。

御霊様なしで、どんなに自分が注意し努力しても、自分の歩みを正しく保つことはできません。桃の木は桃の木です。おしゃべりな人はよく話します。それが生まれつきの性質だからです。御霊様の新しい強い法則に目を開かなければ、決して自らの古い性質に打ち勝つことはできません。

私たちの内に宿り給う主イエス様は、ご自身で私

たちの生活を自由に導いてくださいます。もしどうしても愛することのできない人がいるなら、主により頼んで「どうか、主よ。あなたによってあの人を愛させてください」と祈るとき、御霊様の法則がどんなに強いかが分かるでしょう。

肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。（ローマ　8・3〜4）

このみことばには二つのことが書かれています。一つは、もうすでに主が私たちのために何を為してくださったかということ、二つ目は、主は私たちの内に、何を為そうと願っておられるかについてです。

主イエス様は、罪と死の法則を無力にするために、罪を担って十字架にかかられました。そして、内住の御霊様が法則をまっとうなさることにより、「御霊の原理」が「罪と死の原理」より強いことがわかります。もし私たちが霊によって歩むなら、内住の主は主の御心に適った歩みを為すことができることを、はっきりと知るでしょう。

さて、霊による歩みとは何を意味しているのでしょうか。それは、二つの「働き」ではなく「歩み」です。かつては御心に適おうと闘い、努力していた人が、今は内に住み給う主にすべてを為していただくのです。パウロは「肉による働き」と「御霊の実」という二つのことばを使っています。私たちは自分の力で、肉によって努力することはできますが、そのときは実を結ぶことができません。御霊の実は、内住の主にすべてをゆだねて

御霊による歩み

歩むときにだけ、豊かに結ばれてくるものなのです。

また、霊による歩みとは、まったく御霊様に従わなければできません。肉に従っている間は、肉による歩みをしているのです。

肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。

（ローマ　8・5～8）

御霊による歩みとは、御霊に従っていることを意味しています。御霊に従って歩むとき、はじめて御霊の法則の力を知ることができ、外に現わすことができます。そしてパウロのように「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」と言うことができるのです。御霊様のご支配の内に、まったく自分の身をゆだねてはじめて、御霊様による歩みができるのです。もちろん、いつも御霊様との交わりの中にいることが、御霊によって歩むためには欠かせません。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。

（2コリント　13・13）

主である神様の愛はあらゆる霊的祝福の源です。主イエス様の恵みにより、すべての祝福は私たちのものとなるべく、備えられています。そして、御霊様との交わりはこの測り知れない富を私たちのものとする道なのです。御霊様は私たちにイエス様のもっているあらゆる富を与えるためにお出でになられました。

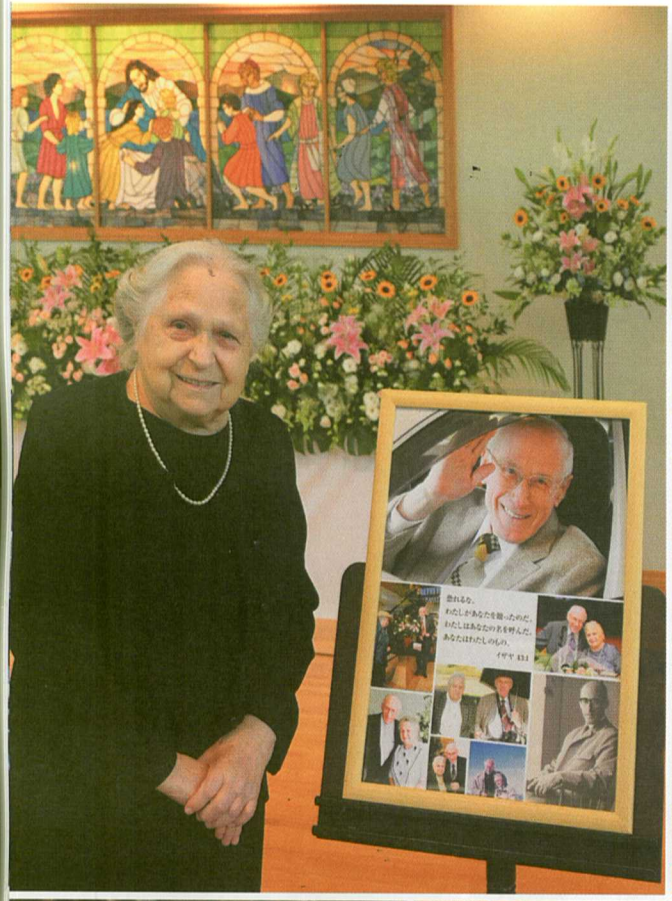
私たちが御子イエス様を受け容れた時、同時に私たちは聖霊の宿り給う「神の宮」となりました。御霊様は、神の御心を私たちに示し、私たちを導き、私たちを祈らせるために、私たちの内に住んでおられるのです。私たちは御霊様が私たちの支配者であることを感謝し、その支配にすべてをゆだねたいものです。

最後に、自分たちが聖霊の宮であることを知って、御霊様の声に従ったある夫婦の話をしましょう。

人気のない、寂しい山の中に住んでいるある夫婦が、旅人を通して信者になりました。その時、旅人は「信者として大切なのは、もうあなたがたは自分のものではなく、内に宿っておられる聖霊の宮であることを知ることだ」と言って、立ち去って行きました。旅人が去ってから、主人は祈ろうと思いますが祈れません。いろいろと原因を考えたとき、それまでぶどう酒をたくさん飲んでいたことが御心に適わないのではないかと気づきました。それで奥さんと一緒に聖書を調べ、ぶどう酒について書かれているところを探しましたが、まだ信仰をもったばかりですからよく分かりません。けれども、内に囁く声は「ぶどう酒をやめる」ということです。しばらくたって、以前の旅人が再び訪れたとき、夫婦は旅人にぶどう酒のことを話しました。「あなたもいないし、聖書も分からなくて困りました。でも、心の中に住んでおられるお方に聞き従ったので、助かったんです」と言いました。すると、旅人は「その心の内に住み給うお方にいつも従っていれば、大丈夫ですよ」と答えたということです。

私たちは内に住み給う御霊様を個人的にはっきりと知っているでしょうか。そして、住み給う御霊様の声に単純に聞き従っているでしょうか。

御霊による歩み



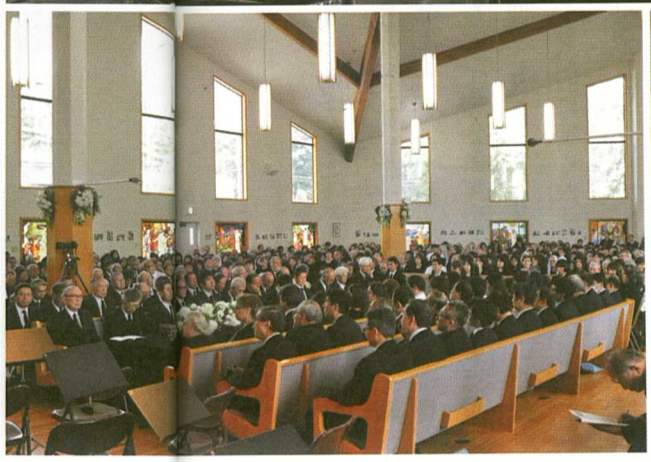

ゴットホルド・ベック兄 葬儀会場




私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。
それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々を
イエスといっしょに連れて来られるはずです。（1テサロニケ 4·14）

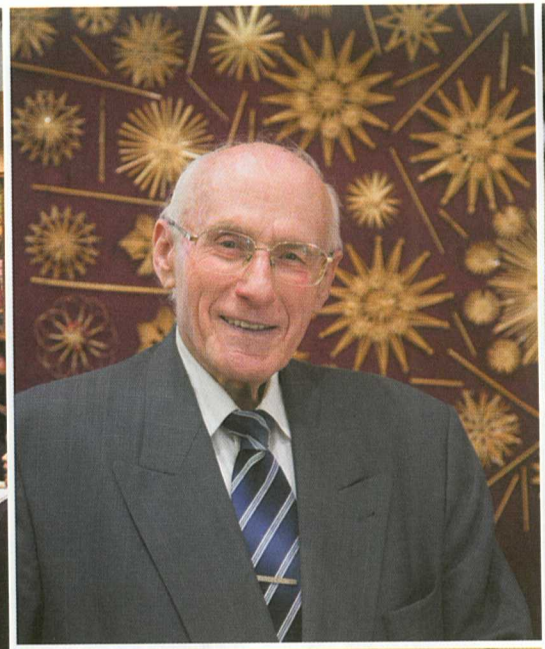


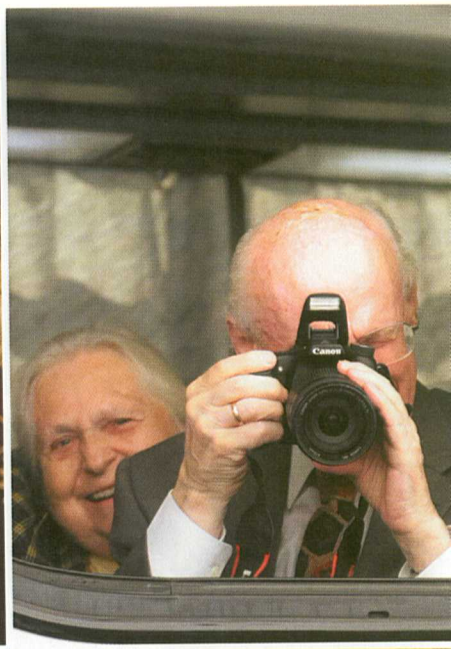

聖書

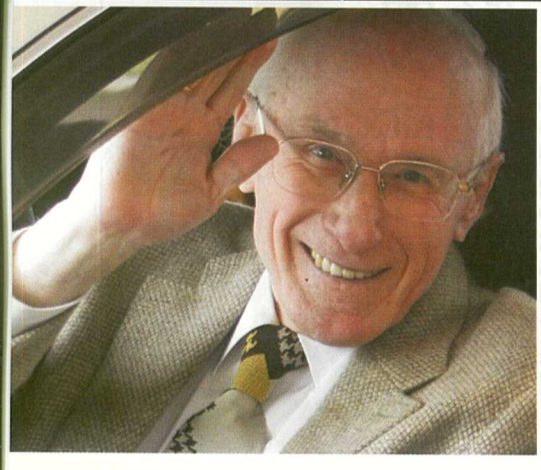









Canon






Canon
EOS 70D



ゴットホルド・ベック兄弟の証し「ただ、主だけに」からの抜粋

ベック兄弟の証し「ただ、主だけに」は、一九九五年にキリスト集会が発行した写真集「40年間日本のために祈り続けたドイツの主にある兄弟姉妹との出会い」の中に収められているものです。ここにはその一部分を抜粋して掲載しました。

想像を絶することが起こりました。「ドイツが戦争に負けた」のでした。私の歩むべき道はすっかり狂ってしまいました。母といっしょに祖父母の農場で働くことになりました。ひとりの若い娘さんが義務教育の最後の一年を済ませるために来ました。彼女は日曜日ごとに聖書の学びに出かけて行きました。アイドリンゲンの姉妹会が、修養会や聖書の学びをするために、十キロ以上離れたルッツェンベルグに大きな家を借りていました。私はこの若い娘さん、つまり将来妻となるミンヘンに、一度いっしょに行ってもいいかと聞きました。

ミンヘンといっしょに行った集会では、ルデア・ヴァレスカ姉妹が聖書の学びを行なっていました。…彼女の輝く目を私は決して忘れません。「私のことは考えなくてよい。たいせつなのは主イエス様であり、主だけなのです」と、彼女は全生涯を通して証しし続けたのです。ルデア姉妹が私たちに告げ知らせてくれた主。ルデア姉妹が輝き全生涯をささげた主。この主に私もまた自分をゆだねることを、静けさのなかで決意しました。

教員養成所（師範学校）で教育を受ける前に、私は「主イエス様のためにだけ存在したい」という願いを持っていました。…主のために奉仕することが私の願いでしたが、どこで、どのように、というのは長い間明らかにされませんでした。教員として主を証しする方向がどんどん強くなっていきました。しかし、イザヤ書のみことばによって、主が私を故郷においてではなく、伝道に出ることを望んでおられることが示されました。

それから私は、日本語の勉強のために十週間イギリスに行き、有名な伝道者ウォッチマン・ニーの親友だったオースティン・スパークスさんのところに行きました。そこには、日曜日ごとに千人近いひとびとが集まってきました。信者たちの喜びは私にも伝染しました。ここのひとつの集会から四十人以上もの宣教師が送り出されていました。スパークスさんは別れる時、フィ

リピンやシンガポール、香港にいるウォッチマン・ニーの同労者の住所を教えてくれたので、私は旅の途中でこれらの主にある兄弟たちを訪ねました。これらの中国人の兄弟たちは完全に主のためだけに生きたいという願いで生き生きしていました。これらの中国の集会は、牧師制度がなく、会員組織もなく、しかし、真に主を証しする力を備え、機能的にまとまっていました。私は最初の旅でこれらのことを自分の目で確認することができました。

ベアーテンベルグの神学校とリーベンツェラー伝道会で身につけた、いわゆる「聖書的武装」は、たしかに知識を備えてはくれました。しかし実際の伝道は、知識だけでは不足でした。・・・真剣な祈りに答えてくださる主、人間が中心になることを決して許されない主に、すべてをゆだね、より頼むほかにすべはありません。

私の妻のミンヘンは、どのような困難や苦境にあっても私にとって真の助け手でした。彼女は、主のご用のために私が完全に自分を捧げることができるようにし、そのさまたげになるようなことを一度もしたことがありません。彼女はほんとうに主の証し人となれるようにと全力をそそぎました。今ふりかえって言えることは、私たちがたどった伝道の道は、明らかに主の導きによるものであり、たとえ何千というほかの可能性があったとしても、ほかの道は決して進みたくないということです。



本稿のベック兄のお証しは抜粋ですが、その全文が「40年間日本のために祈り続けたドイツの主にある兄弟姉妹との出会い」（キリスト集会出版物）に掲載されています。
下記までハガキでお申込みください。（本代は無料、送料のみご負担願います）
お申し込みの際は、略称の「ドイツマガジン」と書いて、購入部数と、送付先の氏名・住所・電話番号を明記してください。

【申込先】

西軽井沢国際福音センター
〒389-0201 長野県北佐久郡御代田町塩野450-15

吉祥寺キリスト集会
〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

葬儀メッセージ

2016年8月28日

重田 定義

私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

（使徒 20・24）

これはパウロがエペソの教会の長老たちにした別れの挨拶の一部ですが、これはそのままベック兄に当てはまる言葉です。まさに、ベック兄は主から使徒として、ミンヘン姉妹とともに日本に遣わされたその日から天に召されるまで六十三年の間、主から与えられた神様の恵みの福音を私たちに伝えるという任務を果たされるために、晩年には糖尿病、白血病、皮膚がんという、三つもの大きな病を抱えられながらも、ご自分のいのちも顧みずに、一日も休まれることなく全力で走り続けられました。その全行程は地球を何十回も回るほどでした。そして、その任務を立派に果たされて、八月二十三日に天の御国にゴールインされたのです。今、ベック兄は天の御国でイエス様の手から栄冠を授けられ、これからはイエス様のみもとで、先に天に召されたベック兄のお子さんたちをはじめ、集会の多くの兄弟姉妹とともに、主のみもとで永遠に祝福された時をお過ごしになるのです。

しかし、残された私たちは、もうベック兄をこの目で見ることも、ベック兄のお声をこの耳で聞くこともできず、ベック兄の温かい手と握手することもできません。それは、ほんとうに寂しいことです。けれども私たちには近いうちに天の御国でまたお会いできるという大きな希望があります。それゆえ、この寂しさに耐えることができます。

パウロは先ほどの別れの挨拶の言葉に続いて、「目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。」（使徒 20・31～32）と言っています。パウロのこの言葉のなかの「三年」を「六十三年」に、「涙」を「祈り」に置き換えてみると、私にはこの言葉はベック兄が私たちに遺してくださった遺言のように思えるのです。

ここで改めて私たちはベック兄が私たちをどのように救いに導いてくださったか、どのように信者として訓練してくださったかを、ごいっしょに思い返してみようと思います。まず、救われるためにはどうしたらいいのか、よき行いをしなくてはならないのか、聖書を勉強しなくてはならないのかと、悩んでいる未信者に対してベック兄はこうおっしゃいました。「そんなことをする必要はありません。イエス様に、ごめんなさい、ありがとう、よろしく、と心から祈れば、それだけで救われます」と。すなわち、神様に背を向けて、わがまま勝手に生きてきたことこそが神様に対する大きな罪であったことを知って、神様に謝り、その自分の罪を身代わりに負って御子イエス様が十字架で聖い血を流し、尊いいのちを捨ててくだ

さったことを心から感謝し、これからの歩みをすべてイエス様におゆだねしますと祈れば、それだけで救われる、ベック兄は救われるためにもっとも必要なことを、このようにごく短い言葉で教えてくださいました。救われること、信じることが、そんなに簡単なことだったのかと、それまで悩みを抱え、重荷を負って苦しんでいた、数えきれないほどの多くの方々が、この短い、しかし最も大切なみことばによって救いの恵みに与かられたのです。

つぎに、信者の信仰の成長についてであります。ベック兄は救われた私たちが、いつまでも救われたままの幼い信仰にとどまることのないように、主のしもべとして成長し、主に用いられるようにと、私たちの信仰の成長を願って、みことばによって訓練してくださいました。おもに毎週火曜日の学びがその訓練の場でした。信仰の成長とは、周りを見ず、自分を見ず、ただ主だけを見上げて、みことばをそのまま受け入れ、それに忠実に従うことであり、それには自己否定と御霊の導きにゆだねることが必要だとベック兄はいつもおっしゃっていました。そのことは私たちにとって、まことに厳しくはありましたが、それが私たちを主のしもべとして成長させようというベック兄の愛から出ていることがよくわかっていました。

もう一つ、ベック兄が願っておられたのは、私たちの集会が主のみからだなる生ける教会として、主のご栄光を輝かし続けることができるように、ということでありました。そのために、救われて集会に集う私たちが、一人ひとり、ローマ人への手紙12章にあるように、それぞれに与えられた賜物を生かして、主のみからだの部分、部分として、互いに愛し合い、支え合い、励まし合い、助け合い、祈り合い、一つとなって、かしらなるイエス様に従うこと、それによって主のみからだなる生ける教会として、主がご栄光を現わされる、とベック兄はいつも語っておられました。

以前からベック兄は、ご再臨待望の信仰なくしては真の信仰はない、と言っておられましたが、からだの不調を起こされることが多くなった昨年頃から、なぜか主のご再臨について語られることが多くなったように思いました。みことばは、イエス様が天から信じる者を迎えに空中まで迎えに来てくださるその日には、信じる私たち兄弟姉妹はイエス様に似た、聖い朽ちないからだを与えられて、手に手を携えて天に引き上げられる、そしてその日はもうすぐに来る、と約束しています。今の世の中の情勢は、聖書のみことばどおり、世の終わりの前兆を明らかに示しており、ご再臨が間近いことを強く覚えます。ベック兄はお会いするたびに、「もうちょっと、もうちょっと」とおっしゃっていました。ベック兄はご再臨のときに、集会の兄弟姉妹といっしょに天に引き上げられることを心から願っておられたことでありましょう。しかし、ベック兄はご再臨の日を待たずに、天の御国に凱旋されました。私たちはみな、ご再臨のときまで、もうしばらくベック兄とごいっしょにと心から祈っていたのですが、主のみこころは私たちの願いとは違っていました。ベック兄は一足先に天の御国に行ってしまわれました。しかし、ベック兄との別れのときはほんの少しの間です。イエス様は、「わたしはすぐに来る、おそくなることはない」と約束しておられます。私たちはそのお約束を確信して一日でもその日の早く来ることを心から待ち望み、祈りつつ、その日の来るまで日々御霊に導かれ、整えられて過ごしたいと切に思います。そして、主の使徒として遣わされたベック兄によって、イエス様という土

台の上に建てられた、みからだなる教会であるこの集会を、その日まで兄弟姉妹が御霊に拠り頼み、心を一つにして守り、私たちの集会が、終わりの世の闇に、主のご栄光を輝かす灯台としての役割を果たすという、ベック兄に与えられた志をしっかりと受け継ぐことこそ、残された私たちの使命であると堅く信じる次第です。

終わりに、もう一度、使徒の働き20章32節を、「三年」を「六十三年」に、「涙」を「祈り」に置き換えてお読みします。

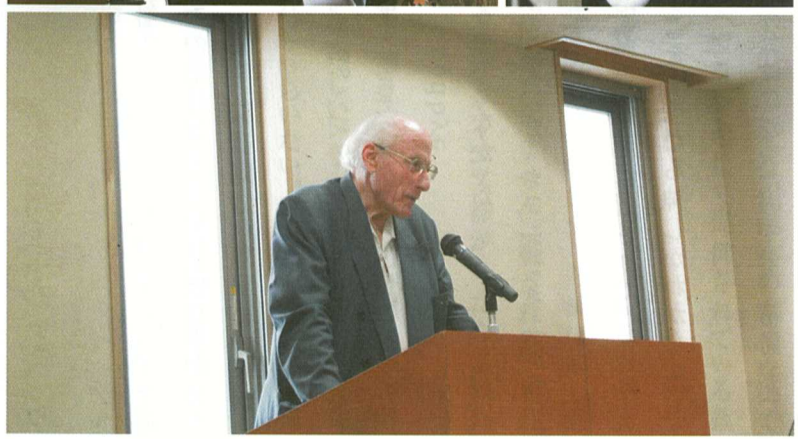
目をさましていなさい。私が六十三年の間、夜も昼も、祈りとともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。

最後に、改めて私たちのところに、愛するベック兄を、主のしもべとして、使徒として遣わしてくださったイエス様に心からの感謝と賛美をお捧げいたします。このご葬儀をとおして主がご栄光を現わされ、御名がほめたたえられますように。









死は終わりではない

ゴットホルド・ベック

何十年ぶり、またここまで来ることができたのは本当に感謝です。いつ初めて来たのか綺麗に忘れました。けども毎週ここまで来て、ドイツ語を教えたんです。学校の創設者の特別な許可を得て学校の図書館でいつも使いなさい、学生たちにイエス様のこと紹介してもらいたい、そこまで言われたんです。ですから非常に楽しかったし、蒔いた種はいつ刈るようになるかはわからないけど、無駄ではなかったことを確信しています。今日の言われたテーマは「死は終わりではない」。

十三年前だったんですけども、九月の十一日、アメリカでとんでもないことが起こってしまったのです。急に数えられない人々は結局殺されてしまいました。このニューヨークの消防署で書かれた言葉があるんです。

No Farewell Words Were Spoken
誰も別れのことばを話しかけなかった。
No time to say Goodbye
さようならを言える暇もなかった。
You were gone before we knew it, and only God knows why.
私たちは知る前にあなたがたは召された。
どうしてかということを主なる神しかわからない。

そういう文章が公けになったのです。結局、どうして、なぜと考えても、答えられる人間はいない。一番危ない、なのは宗教的な考えです。不幸を経験すると、宗教は必ずあなたはわがままだったから、おじいちゃんも変なことやったから、天罰だよ。嘘です。

人間を罰する神はいないんですって。これは聖書の言わんとすることです。どうしていないかと言いますと、必要ないから。イエス・キリストは人間のわがままのゆえに罰せられたから、人間を罰する神は存在していない。これこそすばらしい事実じゃないでしょうか。この事実に基づいて前向きに生活することができるのです。二千何百年前でしょうか、イザヤという預言者は次のように書いたのです。

見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。（イザヤ　12・2）

こういう確信をもつことこそが最高の幸せなのではないでしょうか。聖書を通して提供されている救いとはいったい何でしょうかね。

先ず、罪の問題の解決です。人間はみんなわがままです。過ちを犯す者です。そして、罪滅ぼしのために、結局人間は何もできません。赦された、忘れられたと確信することがイエス様がもたらされた救いの結果です。

それだけではなく、まことの救いは孤独からの解放です。人間はみな寂しい。もう少し大切にされてもらいたい。愛されてもらいたい。まことの救いは「孤独」からの解放です。ちょっと寂しいけどひとりぼっちではない。決して私から離れず私を捨てないという確信が、イエス様の救いを受けた結果なのではないでしょうか。

それから、まことの救いとは「死」を恐れる恐怖

からの解放です。多くの人々は確かに死について考えたくない。けど、どうせいつか死ななくちゃいけないでしょう。諺があるんですね。「備えあれば憂いなし」。安心して希望をもって「死」に向かうことができなければ、今の人生は空しい。けども、「死」を恐れる恐怖からの解放こそが、イエス様を通して提供されている救いです。聖書の中で次のような言葉があります。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

（1コリント　15・55、57）

こういうふうに心から言える人は本当に幸せなのではないでしょうか。

あるドイツの出版社の息子はテレビ局の方に次のように聞かれました。「あなたにとってもっとも大きなショックとは何でしょうかね。癌になることですか。全財産を急に失くすことでしょうか。あるいは一生涯車椅子の中で生活をすることでしょうか」

あの息子の答えはちょっと不思議な答えでした。「もし神がおられたら、それこそ考えられないほど恐ろしいことです」

主なる神がおられれば、「死」は終わりではない。そうすると必ず死後、さばきを受けることになるからです。結局、天国か地獄かのどちらかです。確かに、地獄すなわち永久的に光の見えないこと、平安なし喜びなし希望なしに永遠に存在することとは考えられないほど恐ろしいことです。天国について聖書は言っています。

もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。

（黙示録　21・4）

本当に来たるべき栄光はすばらしいものです。ですから聖書は簡単に言っています。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

（ローマ　8・18）

今苦しい、辛い、どうしたらいいかわからないけれど、それはおしまいではない。

よく知り合いの方、色々なこと経験しました。先ず奥さんは癌になって召されましたし、そして、彼も何十年後ですけど同じく病気になりました。自分の葬儀のために彼はある小冊子を作ったんです。

はじめの文章は、「本日は、私、新井稔の昇天式にお集まりくださいまして、本当にありがとうございます」

前夜祈祷式と葬儀に出た人々はもう七百人以上でした。私もはじめて彼に出会ったのは、もちろん何十年前だったんです。出会った場所は名古屋のある病院でした。きっかけになったのは彼の奥さんの病気でした。彼はその時四十九歳で、奥さんは三十九歳でした。お二人は、その日イエス様しかないと思うようになり、イエス様を信ずるようになりました。それから、お二人はともに悩み、ともに祈るようになりました。あきらめる必要はない。人間だって、歳のため、病気のために死にません。創造主は呼ぶまで心配しなくてもいい。

別の時だったんですけども、見舞いに行った時、あの奥さんはご主人である方に向かって、次のように

死は終わりではない

言いました。

「病気になったのは良かったね、お父さん」

彼の答えは、「あなたのおかげです」

その意味は、もし病気にならなかったなら、救いを求めようとしなかったし、救い主に出会わなかったに違いない。そうすると、まことの喜びなし、本当の平安なし、希望なしで存在しなければならなかったに違いない。だから、病気になったのは良かった、と奥さんは言えたのです。結局永遠のものを得るようになったからです。彼は次のように書いたことがあります。

「もし、聖書を知らなかったら、苦しみや悲しみにさいなまれ、運命を呪ったことでしょう。イエス様信じて、順子は死の恐怖から解放され、私の生き様が変わりました。今は再び天国で順子とめぐりあえる喜びと主のみこころと愛に感謝の気持ちです」

今から多分三十四年前に、うちの娘リンデという女の子は、癌になりました。二十歳で天に召されたのです。この娘はイエス様のために実を結びたいと切に願っていました。自分の健康や自分の幸せは枝葉のことでした。ただイエス様だけが栄光をお受けになる時、私は嬉しい。これこそ娘の態度でした。そして、この証は実を結ぶようになったのです。多くの人々は、イエス様を求めるようになり、イエス様をたずね、イエス様に出会うようになったのです。

ドイツで、一人の方は私に尋ねてくれました。そして次のような質問をしました。リンデがそんなに喜んで死ぬことができたのはいったい何だったの？

そして、彼女が、そんなにもこの世から離れて、目に見えるものに関心をもたず、目に見えないものに関心を持ったのはいったいどうしたんでしょうか？

娘は次の文章を書きました。亡くなってから、彼女の聖書の中で見つけた文章です。

「人格者とは死を直視することができる人です」

ある人は死後の問題は死んだ時に初めてわかることであって、この世で生きている間はそんな問題に煩（わずら）わされない方がいいと考えています。そのような考え方について私たちはいったいどのような態度を取るべきなのでしょうか。確かに「死」についての人間の考え方は色々違っています。一般に、「死」について何か話そうとすると嫌な顔して、それを拒む人が少なくない。

太陽王と呼ばれた有名なフランスのルイ14世は葬式の列が通るのを見た時、すぐ「カーテンを閉めろ」と命令した、と伝えられています。彼は、ご存知のように自分が望むものは何でも持っていました。名誉も地位も財産、その他あらゆるものを手に入れた有名な王でした。けれど、彼が一番嫌ったものが、正に「死」だったのです。ドイツの偉大な詩人であり政治家でもあったヴォルフガング・ゲーテという男も「死」を嫌ったため、非常に親しい人の葬式にさえも出席しなかったのです。

多くの人はいろいろなことについて計画的に考え、その計画にしたがって行動しようとしますが、「死」に対しても同じように考えようとすると、もう滅茶苦茶になって何の計画も立てられなくなってしまうため、「死」のことに対してはかたくなに眼をつむってしまうのです。そして、彼らは生きている限りはできるだけ楽しみたいという強い願いを捨て切ることができないのですけれども、悪魔はそのような人々にささやいたり、「死」のことについて深刻に考えることをやめさせたり、あるいは目をくらませて享楽的な生活へと誘惑して、絶えず悪の罠に引き込もうとしているのです。

死は終わりではない

けれども、実際問題として考えると、実際は以上に述べたことは違った結果を示しています。すなわち、日本では毎年四千人を超える人々が交通事故で死んでしまいます。そして、毎年三万人もの人が自ら命を捨てています。また第一と第二の世界大戦の、二度にわたる世界戦争では八千万人の人々が殺されてしまったのです。残された家族の悩み、また苦しみはいかなるものでしょうか。「死」とは否定することのできない事実ですから、「死」について真剣に考えようとしない者は愚かであると言わざるを得ません。

たとえばロメオという島で非常に珍しい儀式、ひとつの習慣があります。すなわち、それは結婚式の時に新郎と新婦との間に死んだ人の頭蓋骨を置くという風習です。その意味するところは、人生でもっとも幸福な時に死を忘れないように、ということであると言われています。

冷静な人は誰でも「死」がすべての終わりを意味するのではない、ということを認めざるを得ません。主なる神によって造られた人間の人生の目的が「死」によってピリオドを打たれるとはどうしても考えられないからです。働いている者は必ず何かの目的をもってます。もし、大工さんが無計画に目的なき家を建てるようなことがあったとしたなら、それこそまったく意味のないことです。仕立て屋さんが布（きれ）を裁断して洋服を作る場合に、必ずはっきりとした目的をもっていることとは言うまでもありません。意味がなく、目的がなく、計画がなければ、誰も働くことができません。

したがって、全能なる主なる神が人間を創造された時にも、はっきりとした一つの目的をもっておられたことは明らかです。主なる神は、決して人間の「死」や滅びを望んでおられるのではありません。主なる神は、人間が生きることを望んでおられます。したがって、私たちは「死」のことについて考える時には、「死」そのものだけを思い出すのではなく、死後に来るものに注意を向けなければならない。ちょっと六つの点について簡単に一緒に考えたいと思います。

第一番目、私たちの数十年間の人生というものは、それですべてが満たされるためにはあんまりにも短かすぎます。現在は、われわれの世界では一番長生きしたとしても、精々百二十歳ぐらいが限界です。けれど、百歳まで生きながらえた人の数も何と少ないのではないでしょうか。私たちは、この問題について真剣にまじめに考えるならば、聖書の言っていることが正しい、と認めざるを得ません。すなわち

あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。（ヤコブ　4・14）

われわれの人生がちっぽけなものであることは私たちでさえよくわかることですが、六千年を越える人類の歴史と言えば、主なる神の目から見ると無に等しいものです。私たちは百年前にどこにいたでしょう。そして百年後にはいったいどこにいるのでしょうか。われわれの人生が余りにも短かすぎるため、死後の世界があるのではないかという考え方が自ずから出てくることも当然と言えましょう。この問いに対して、聖書ははっきりと別の世界があることを教えています。なぜなら、人間の人生は余りにも短かすぎて、そこにはほんとうの意味がなく、死んでから初めて本当の世界が始まるからです。

二番目、主なる神ご自身が、人間の心に、「永遠」を思う思いを授けられたと聖書は言っています。人

死は終わりではない

間は、主なる神のかたちに似せて造られました。そして、主なる神がその人間に「永遠」とは何か、「完全」とは何かを理解する力をお与えになったのです。人間は決して過ぎゆく儚（はかな）いものや不完全なものによっては心が満たされません。人間は心から愛し、心から愛されることを望んでいます。それですから、この世の人間的な愛に何回も失望するのです。

芸術家は情熱をもって完全なものを作ろうとしますが、しばしば自分の作った物を破壊してしまうのです。なぜなら、自分の作った物と言えども決して完全なものではないからです。青年は将来に対して無限の希望を持ち、それが永遠に続くように思われるなのではないでしょうか。老人はそれほど夢多き将来を考えることがありません。若者にとっては一年と言えども非常に充実した意味のある長い一年のように思いますが、老人は過ぎゆく一年が非常に短く、はかないものであるということを体験から知っておるのです。

また、多くの婦人はいつまでも若く、美しくありたいために莫大な費用をかけたり、そのために一生懸命努力したりしますが、結局どうすることもできないことを知って失望してしまいます。

人間の欲望は新しいものが次から次へと与えられても決して満足していません。それは悲劇であると言わざるを得ない。次から次へと目まぐるしく移り変わる、新しい流行を必死に追い求めても、そのことが幸せをもたらすとは言えません。実業家は、日夜金儲けのために努力します。独裁者は、自分の国を支配するにとどまらず、やがては世界を支配しようと無限に欲望を高めていきます。いわゆる仕事の鬼は、仕事だけをたいせつにして、ほかのことは

何も考えないようにと一生懸命に苦労しますが、結局は何のために生きているのかわからなくなってしまい、息が詰まってしまうのです。人間的に見ると仕事が成功し、金持ちになり、病気もせず、非常に幸福そうに見えた人であっても、つねに満たされざる思いが心の中にあるため、主なる神の目から見ると決して幸福ではありません。

しかし、主なる神の御心は私たち人間が永遠のいのちを持つことに他ならない。それですから、主なる神以外に私たちの心は満たしてくれる方は誰もいません。

ヨハネ伝4章の中で、次のようなこと書いています。五人の夫をもつ姦淫の女のことが描かれています。疑いもなく彼女は幸福になりたいという願いを持っていました。しかしながら、彼女の切なる思いも決して満たされなかったのです。けれども、主イエス様は彼女に言われました。「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」（ヨハネ 4・14）と。女はイエス様に言ったんですね。

先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。

（ヨハネ 4・15）

有名なアウグスティヌスという男は「私が主なる神のもとで憩うまではまことの平安がない」と告白したのであります。

三番目の点、もしも死後の世界がなかったならば、この世はまったく意味のないことでしょう。永遠のものからはじめて、われわれの人生が意味あるもの

死は終わりではない

となるのです。もしもすべてが「死」でもって終わるとすれば、生きている時のあらゆる努力は、いかなる価値を持っているのでしょうか。ソロモンという大王様はこの世のものはすべてむなしい、「空の空である」と言いました。けれど、彼は名誉、地位、財産、その他ありとあらゆるものを持っていました。世界一の金持ちでした。けれど、彼は「すべてはむなしい」と告白せざるを得なかったのです。この世でとこしえに価値を持続するものは何一つありません。私たちが生きている時に持っているものはすべて、「死」と同時に私たちから離れてしまうのです。

唯物主義者は次のように言うでしょう。私たちは飲み食いしようではないか、明日の分からぬ命なのだ。しかし、この哲学は憤慨と絶望の表現であると言えましょう。なぜなら、若くて金もあり、時間も充分あるものが飲み食いすることは難しくないかもしれない。けれど、歳とって、金もなくなった時に、ただ病と死だけが待つようなことになるでしょう。死後の問題を本当に解決することができないならば、まさに自殺をするか、気違いになるか、いずれにしても、まことに悲惨の道だけしか残されていないことでしょう。けれども、自殺はこの問題を正しく解決することではなく、それはそれから逃避することを意味するのではないでしょうか。

四番目、この世の正義と言えども、決して私たちを心の底から満たしてくれるものではありません。なぜならば、正義と言えども、この世においては私たちの完全な正義に対する熱望を満たしてくれないからです。この世における多くの不義は、必ずしも正しくさばかれているとは限りません。また反対に、この世で正しく生きている人々がそれ相当の報酬を与えられているかと言うと、必ずしもそうとは限りません。むしろ真理のために迫害されたり殺されたりした人さえいるのです。もしも死によってすべての終止符を打つならば、人生はまったく意味のないことです。けれども、事実は決してそうではありません。確かに死んで別れることはキリスト者にとっても等しく悲しいことであり、寂しいことであるかもしれないが、それにもかかわらず……、

五番目、死んでから再び愛する者と会うことができるという確信をもつことができるということは、深く考えさせられることです。愛する者との死の別れは一時的なものにすぎない、必ず再会できるという確信をもつことは、信ずる者にとって最高の慰めであり、また喜びでもあります。

六番目、その時に、顔と顔を合わせて相まみえることができ、イエス様に似た者となることこそ、創造主なる神のご計画に他なりません。ただ単に人間が永遠の存在として造られ、完全なものを追い求めていくために、造られただけではなく、主ご自身のために造られたのだ、ということを忘れてはなりません。すなわち初めの人間であるアダムの罪により、主なる神から離れてしまった人間は、どうしても神との生き生きとした交わりを回復しなければ生きていくことができません。救われた者が永遠にイエス様との交わりの中に時を過ごすことができるという確信を持つことができるとは、考えられないすばらしいことです。あらゆる宗教はあの世のことについてはっきりしたことを言わず、単なる想像に基づいて抽象的なことを言っているにすぎない。

しかし、神のみことばである聖書は信ずる者にとっては、未信者にとっても死後の世界があることをはっきりと言っているのです。聖書によると、アブラハム、イサク、ヤコブが、すなわち四千年前に生きた人々

死は終わりではない

が今もなお生き続けていることがわかります。それに対して悔い改めようとしなかった人々はよみの国に落ちて行かなければならず、そこで苦しまなければなりません。イエス様は、頭を下げたくなかった人々が、死後よみの国で苦しんでいる時には決して、無意識な状態であるのではなく、はっきりとした意識を持って苦しまなければならないと言われました。このように死んだ後ですべての信じようとしなかった人々は、よみの国でやがて主なる神の前に引き出され、最後の審判を受けなければなりません。

救われている人々、また救われていない人々も、死後も生き続けるように、終わりがないのです。主なる神によって救われた人々は永遠のいのちを持ち続けることは明らかです。つまり、死後、救われた人々は永遠のいのちをもって主なる神とともにおり、悔い改めたくない人々は苦しみと苦悩の中に滅びなければならないと聖書は言っています。

これらのことをわかりやすく要約すると次のように言えるでしょう。すなわち、まず第一に、人間は生まれた時に、「魂」が与えられ、そのために永遠に存在する権利を与えられます。第二に、そのような人間が、罪を悔い改めて、イエス様を信ずる信仰によって新しく生まれ変わった時に、「永遠のいのち」を与えられます。第三に、そのような人は復活の時、「不滅のからだ」を与えられます。確かに未信者と言えども永遠に存在するわけですが、しかしながら、新しく生まれ変わらない限り、ほんとうのいのちを持つことができません。

本当のいのちは、イエス様との交わりの中にあってはじめて存在するのです。ヨハネによる福音書に次のように書かれています。

永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。（ヨハネ　17・3）

そしてヨハネ第一の手紙5章20節にみると、書いてあります。「この方（イエス・キリスト）こそ、まことの神、永遠のいのちです。」（1ヨハネ 5・20）と、あります。まことの主なる神を信じない未信者は、この世でほんとうのいのちを持っていません。すなわち、主なる神との平和を知らないから、満たされていません。

前に話した有名な詩人であるヴォルフガング・ゲーテという男は、彼の全生涯において二十四時間本当の幸福だったことはなかったと告白したのです。なぜ人間はそのような満たされない状態にあるのでしょうか。その原因はまさに人間の心に本当の平和と平安がないということです。人間は死後さばきを受けるため、人間には平安がないと聖書は言っています。前に言いましたように二十歳で天に召された娘は「人格者とは死を直視することのできる人」と書いたのであります。「死」を直視することのできる人とは、すなわちイエス様によって救われた人です。だからパウロは「キリストこそ私の平和だ」と証しました。イエス様は主なる神との贖いをなしてくださいました。主イエス様は主なる神に敵対する関係を無にしてくださったのです。われわれ人間が主なる神から離れている「罪」あるいは「債務」を、イエス様の尊い犠牲によって完全に取り去ってくださったのです。

まことの平和は、イエス様を信ずることによってのみ与えられるものです。イエス様を信ずる者は、みな、今、主なる神との平和、また贖いをもっていることを信じ、確信することをゆるされています。

主なる神は、もはや怒りを持っておらず、イエス様

死は終わりではない

の犠牲によって完全なる贖いと和解を成就させているのです。もはや何も神との結びつきを引き離すことはできません。主なる神との平和を持っている者は、もはや死を恐れることはありません。なぜならば、まったき平安のうちに休むことができるからです。主なる神との平和がなければ、すなわち、主なる神との交わりがなければ、ほんとうの喜びも幸福もありません。人生は無意味な価値のないものになってしまいます。

有名な音楽家であるヨハン・セバスチャン・バッハは数々の名曲を残しましたが、その中でもはっきりと歌っているように、心から「死」を待ち望んでいたのです。つまり生きているこの世よりも、死んだ後に来る世界のすばらしさを信仰の目で見ることのできたバッハは、主を賛美せざるを得なかったのです。信ずる者と言えども、罪人である以上、本来は未信者とまったく同じように、よみの国へ行かなければならない運命に定められていましたが、ひとり子なるイエス様の十字架によって、罪が贖われ、罪から解放されたために永遠のいのちをもつことができたのです。そのために、信ずる者はもはや「死」を恐れる必要がない。ローマ8章、有名な箇所ですけど、次のように書いています。

キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。（ローマ　8・1）

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・38～39）

この意味で、「死」は信ずる者にとって信仰により、イエス様に近づくための橋渡しの役割を果たすと言えましょう。したがって、信ずる者は「死」を恐れる必要を全然持たないわけです。

もう一ヵ所読みます。

生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ　1・20～21）

主の恵みによって救われた人々にとって、死ぬことはイエス様とともになることを意味していますから、益です。パウロは死ぬことと生きることとどちらが良いか考えた時、死ぬことを選んだのです。けれども、このパウロは多くの人々のために奉仕をしなければならない必要を感じていたため、さらに生き続けることを決心しました。この問題がなく、パウロ一人だけのことであったならば、恐らく死ぬことを選び、死ぬことを喜んだに違いありません。うちの娘の場合はそうだったんです。軽井沢に次のような意味の聖句が刻まれたお墓があります。「この世を去ってキリストとともにいることのほうがはるかにすばらしい」と書いてあります。救われた人々にとっては、未信者すべてが抱くような「死」の恐ろしさが全然ありません。

ドイツのアドルフ・ヒットラーは第二次大戦中、六百万人にのぼるユダヤ人を殺してしまいました。けれど、その当時オランダにテン・ブームという家族がおり、多くのユダヤ人を匿いました。ところが、結局ナチスの秘密警察であるゲシュタポがそれを見つけ

死は終わりではない

出し、全員強制収容所に送ってしまいました。そこでコーリン・テン・ブームという一人の女性を除いてみんな殺されてしまいました。けれど、その時、彼女の父親は家を去るにあたって、大喜びで次のように言いました。「一番すばらしいことがこれから始まる」と。

このことばの意味は、彼らの出発が恐ろしい死の旅路でなくて、イエス様とともになるための最高の喜びと感謝の旅に出かけるという意味です。将来与えられる栄光を見て、主イエス様のものとなった者は、生ける希望を持っているのです。結果としていかなる患難の時にも主を喜ぶことができる。なぜなら、将来に対して何の不安も持っていないからです。私たちは、将来のことを知ることができませんけれど、イエス様を知っております。それですから、将来に対するすべての問題が答えられていることになるわけです。イエス様ご自身がわれわれの将来です。あらゆる不安と心配はイエス様によって慰められるのです。イエス様は、ご自身を信頼する者を必ず目的地まで導かれるのです。それですから、私たちは、今、喜ぶことができ、誇ることができ、感謝することができるのです。

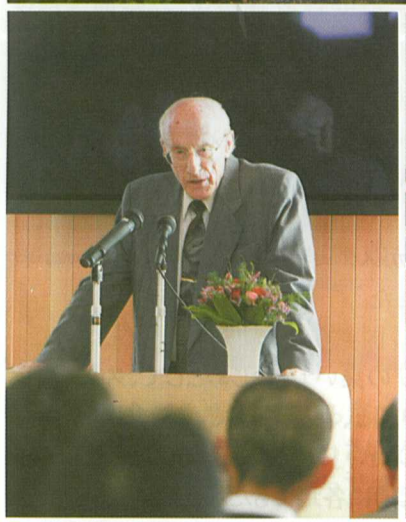
三千年前この世界を治めた王様であるダビデは言いました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇　23・1、4）

このような確信をもつことこそが最高の幸せなのではないでしょうか。













ゴットホルド・ベック兄弟の足跡

1930年3月25日　ドイツ シュトゥットガルト ミューリンゲンで誕生。

1945年　15歳の時、第2次世界大戦終結。
その年、ミンヘン姉妹と出会い、ほぼ時を同じくして主イエス様に出会い救われる。
その後4年間、国の教会が作った師範学校で学ぶ。

1950～1952年　スイスのベアーテンベルグ神学校で学ぶ。
卒業後、イギリスで日本語を学ぶための英語の勉強を開始。

1953年9月　23歳の時、来日。
1年後に来日したミンヘン姉妹と結婚。
東京で日本語を2年間学び、その後リーベンツェラーミッションの宣教師として、茨城県那珂湊で9年間の伝道生活を送る。
その間、6人のお子様方が誕生。

1964年11月　団体での働きを辞め、主イエス様の導きだけに頼るために、東京の吉祥寺に住まいを移し、単独で伝道活動を始めた。
やがてケーキの会がスタートし、次第に多くの人々が救われていくようになった。

1992年4月　長野県の御代田に「国際福音センター」が建設された。

1994年　第1回の「ドイツ喜びの集い」をはじめとして、スイス、アメリカ、カナダ、タイ、中国と、世界各地で、また、日本全国各地において「喜びの集い」がもたれるようになった。
家庭集会は毎日のように各地でもたれた。
礼拝場所は国内だけで45ヶ所となって、現在に至っている。

2004年　74歳で白血病を発症し、闘病を続けながらも精力的に、各地に主イエス様を伝えるために出かけ続けた。
以降、3年に1度の抗がん剤治療を3度受けた。

2010年　東京吉祥寺に新会堂が建設された。

2016年6月　「岡山喜びの集い」を最後に、出かけることができなくなる。

2016年8月　4度目の抗がん剤治療を受けるための療養中、8月23日13時29分　86歳で主のみもとへ召された。







教会はキリストのからだであり、
いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の
満ちておられるところです。（エペソ 1·23）





ゴットホルド・ベック兄弟の足跡

1930年3月25日	ドイツ シュトゥットガルト ミューリンゲンで誕生。
1945年	15歳の時、第2次世界大戦終結。 その年、ミンヘン姉妹と出会い、ほぼ時を同じくして主イエス様に出会い救われる。 その後4年間、国の教会が作った師範学校で学ぶ。
1950～1952年	スイスのベアーテンベルグ神学校で学ぶ。 卒業後、イギリスで日本語を学ぶための英語の勉強を開始。
1953年9月	23歳の時、来日。 1年後に来日したミンヘン姉妹と結婚。 東京で日本語を2年間学び、その後リーベンツェラーミッションの宣教師として、茨城県那珂湊で9年間の伝道生活を送る。 その間、6人のお子様方が誕生。
1964年11月	団体での働きを辞め、主イエス様の導きだけに頼るために、東京の吉祥寺に住まいを移し、単独で伝道活動を始めた。 やがてケーキの会がスタートし、次第に多くの人々が救われていくようになった。
1992年4月	長野県の御代田に「国際福音センター」が建設された。
1994年	第1回の「ドイツ喜びの集い」をはじめとして、スイス、アメリカ、カナダ、タイ、中国と、世界各地で、また、日本全国各地において「喜びの集い」がもたれるようになった。 家庭集会は毎日のように各地でもたれた。 礼拝場所は国内だけで45ヶ所となって、現在に至っている。
2004年	74歳で白血病を発症し、闘病を続けながらも精力的に、各地に主イエス様を伝えるために出かけ続けた。 以降、3年に1度の抗がん剤治療を3度受けた。
2010年	東京吉祥寺に新会堂が建設された。
2016年6月	「岡山喜びの集い」を最後に、出かけることができなくなる。
2016年8月	4度目の抗がん剤治療を受けるための療養中、8月23日13時29分　86歳で主のみもとへ召された。







教会はキリストのからだであり、
いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の
満ちておられるところです。（エペソ 1·23）



